

国立国語研究所学術情報リポジトリ

青森県むつ市田名部方言の可能表現

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002999

青森県むつ市田名部方言の可能表現

三宅 俊浩¹

1 はじめに

本稿は、国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトおよび人間文化研究機構広領域連携型プロジェクト「方言の記録と継承による地域文化の再構築」として、青森県むつ市田名部において2018年8月30日・31日の2日間で行われた方言調査の中から、可能表現に関する項目（調査例文は後掲）について報告するものである。ただし調査の過程で、調査票にない文についてもいくつか尋ねた。本稿ではそうした例文に対する話者の回答を含め、報告を行う。

なお、以下では当該地域の方言を「むつ市田名部方言」と称する。話者の回答を挙げる際は可能表現をカタカナ表記し、それ以外はひらがなで表記する。

2 可能表現の調査例文

2.1 調査票の調査例文

可能表現に関連する調査例文を挙げる。まずは、調査票にある例文である。

- (1) 怖いからひとりで行けない。
- (2) 体が弱いので遠くまで行けない。
- (3) 足が痛いので今日は行けない。
- (4) 雨が降っているので行けない。

- (5) 友達がいて心強いので、肝試しにも行ける。
- (6) よく知った場所なので一人で行ける。
- (7) 今日は体調がいいので行ける。
- (8) 今日は天気がいいので行ける。

- (9) 昔は早く走ることができた。（でも今は早く走れない。）
- (10) 昔は早く走ることができなかった。（でも今は早く走れる。）

- (11) このペンはまだ書ける。
- (12) このペンはよく書ける。

¹ みやけ としひろ：名古屋大学大学院生（miyake_toshihiro0510@yahoo.co.jp）

- (13) 怖いので行くことができなかった。
(14) 歩くのが遅いので遠くまで行くことができなかった。
(15) 体調が悪かったので行くことができなかった。
(16) 天気が悪かったので行くことができなかった。

(17) 歌ったら怖くなくなって、ひとりで行くことができた。
(18) 歩くのが早いので遠くまで行くことができた。
(19) 体調がよかったので行くことができた。
(20) 天気がよかったので行くことができた。

次にこれらの分類枠について記しておく。分類枠は次のような組み合わせで得られる。

- ①潜在可能か実現可能か
- ②肯定か否定か
- ③可能の意味は心情可能／能力可能／内的状態条件可能／外的条件可能のいずれか

②については可能か不可能かと言い換えられる。①と③は渋谷（1993）の分類基準によったものであるため、これら2つの観点については渋谷（1993）を援用して説明する。

①の分類枠は、可能の意味を「ある動作が実現することを含意するか否か」によって分けたものである。「実現可能」は動作の実現（非実現）を含意するもの、「潜在可能」は動作の実現（非実現）を含意しないものである。

実現可能の例としては、「三日かかってようやくレポートが書けた」（つまり実現）や「三日かけても結局レポートは書けなかった」（「非実現」という形で既実現である）などがある。これらはいずれもレポートを書くための何らかの動作が発動（試行）されているため、実現可能に分類されることになる。したがって、調査例文では（13）～（20）が実現可能に該当する。なお、（9）と（10）はタ形で現れてはいるものの実現可能には分類されず、潜在可能に分類される。それについては次に潜在可能の説明をする中で述べる。

潜在可能の例としては、「僕にはたとえ三日かけてもレポートなんか書けない」や「最近忙しいから、悠長にレポートなんか書いてもらえない」「太郎はその時レポートが書けたはずだ（実際に書いたかどうかは知らないが）」などがある。これらはいずれも、「書く」という動作を実行に移す（移した）かどうかについては言及せず、動作主体の潜在的な実現可能性を述べているだけのもの」（渋谷 1993:14）である。そのため、調査例文（9）・（10）はタ形で現れてはいるものの過去の潜在的状態を言うものであるから、潜在可能に分類されることになる。したがって、調査例文では（1）～（12）が潜在可能に分類される。

次に③の「可能の意味」の分類枠について述べる。この観点は、可能の意味を「ある動作を行うことがなぜ（不）可能である（あった）のかという、その（不）可能であることの制約条件」によって分けたものである。渋谷（1993）は心情可能／能力可能／内的条件可能／外的条件可能に分けている。それぞれの内実についての渋谷（1993）の説明を以下に引用する。

- (i) 心情可能…動作実現のための条件が、主体の心情・性格・勇気などにある場合
- (ii) 能力可能…動作実現のための条件が、主体のもつ(体力・技術的な)能力にある場合
- (iii) 内的条件可能…動作実現のための条件が、主体内部の「一時的な」気分的・肉体的条件にある場合
- (iv) 外的条件可能…動作主体の能力いかんにかかわらず(一般には前提とされる。(略))、動作実現のための条件が、主体を取り巻く外的世界にある場合

なお、これらの分類は潜在可能／実現可能のいずれにも適用されるものである。したがって、本調査票では、(1)・(5)・(13)・(17)が心情可能に、(2)・(6)・(9)・(10)・(14)・(18)が能力可能に、(3)・(7)・(15)・(19)が内的条件可能に、(4)・(8)・(11)・(12)・(16)・(20)が外的条件可能に該当する。

以上の①②③の観点を組み合わせて表の形に整理したものが、以下の表1である。

表1 可能表現の分類と調査番号の対応

条件の所在	潜在可能		実現可能	
	肯定	否定	肯定	否定
心情	5	1	17	13
能力	6・9	2・10	18	14
内的条件	7	3	19	15
外的条件	8	4	20	16

調査例文(11)・(12)は国立国語研究所『方言文法全国地図』(GAJ)で「属性可能」として立てられている項目に該当する。渋谷(1993)を元とした表1では位置づけが難しいため表1には入れていないが、渋谷(1993)には「外的条件可能」の説明の中で「外的条件には(略)動作を行うための手段など、多くのものがある」という記述があるため、「書く」ための「手段」としての「ペン」の状態と考え、外的条件可能・潜在可能・肯定の枠に入れて考えることができるかもしれない。なお調査例文(11)・(12)は、(11)が一時的な性質であるのに対し(12)は恒常的な性質である点に違いがある。

2. 1. 1 先行研究の記述について

以上で可能の意味による分類を設けたのは、青森県方言では可能の意味によって形式を使い分けるといった報告が既にあるからである。青森県方言の概観を行った此島正年(1982)では、青森県方言は「能力可能」と「条件可能」を形式で区別することが述べられる。

受身はエル・ラエルを付けて、打タエル・投ゲラエル・来ラエル・サエルのように表わす。この形はそのまま可能にも用いられるが、(中略)たとえば、読メル・起キレルと読マエル・起キラエルとでは、前者が「能力可能」で、たとえば教養があるからむずかしい本も読メルのように、後者が「条件可能」で、周囲が静かになったから落ち着いて本が読マエルのように、区別するばあいが少ない。

つまり五段動詞では可能動詞とレルとで、一段・カ変動詞ではいわゆるラ抜き言葉とラレル

とで区別するようである。なお、本稿では一段・カ変動詞のもの（起キレルや来レル）も含めて「可能動詞」と呼び、専ら形態を問題とする場合は「可能動詞形」と呼ぶ。

此島（1982）の言う「能力可能」「条件可能」が、今回の調査における「心情可能」「能力可能」「内的条件可能」「外的条件可能」のどこまでを含むかが注意される。

2. 2 調査票外の調査例文

2.1 節で挙げた調査例文は「行く」「走る」「書く」を用いた例文であり、いずれも五段動詞である。つまり、一段動詞・カ変動詞の可能形はわからない。そこで、一段動詞やカ変動詞を用いた例文も調査の過程でいくつか尋ねた。尋ねることのできた例文は以下のようである。

(21) (派手な服を見ながら) 恥ずかしくて着ることができない

(22) 孫はまだ小さいので一人で服を着ることができない

(23) この服はもう小さくなったので着ることができない

(24) 孫は大きくなって一人で服を着ることができるようになった

(25) この服は昔のものだけどまだ着ることができる

(26) 目覚まし時計があるからちゃんと起きることができる

(27) 嵐がひどくて一歩も外に出られなかった

(28) 天気がよかったのでやっとここに来ることができた

(21)～(23) は一段動詞「着る」を用いた否定の潜在可能で、順に心情可能・能力可能・外的条件可能である。内的条件可能は尋ねることはできなかった。

(24) と (25) は一段動詞「着る」を用いた肯定の潜在可能で、順に能力可能・外的条件可能である。心情可能・内的条件可能は尋ねることはできなかった²。なお共通語では、一段動詞は動詞の音節数によって可能動詞形の許容度が異なることが知られている。具体的には、音節数が少ないほど許容しやすく、逆に長いほど許容しにくい（「着れる」は許容しやすく「信じれる」は許容しにくい、など）。そこで例文 (26) では3音節動詞「起きる」も尋ねることにした。なお (26) は、潜在可能で、可能の条件は外的条件である。

(27) と (28) はそれぞれ否定の実現可能、肯定の実現可能である。可能の条件はともに外的条件可能である。心情可能・能力可能・内的条件可能も尋ねるべきであるが、今回の調査では尋ねられなかった。

以上、一段動詞・カ変動詞を用いた例文番号を先の表1に倣って位置づけると、以下の表2のようになる。空欄は未調査箇所であり、今後の課題としたい。

² 「着る」の心情可能（肯定形）は想定しにくい。

表2 一段動詞・力変動詞を用いた可能表現の分類と調査番号の対応

条件の所在	潜在可能		実現可能	
	肯定	否定	肯定	否定
心情		21		
能力	24	22		
内的条件				
外的条件	25・26	23	28	27

2.3 調査票内で「自発」に分類されるものについて

調査票内では（「可能」ではなく）「自発」として分類されている例文がいくつかある。これらは標準語では可能形式で表現されるものであるが、東北方言では自発形式（青森県方言ではサル・ラサル）を用いて表現される可能性がある。これらの例文についての回答も、本稿では記述することにした。

調査票内で「自発」に分類され、かつ標準語では可能形式で表現される例文は以下の通りである。

- (29) 酒が飲みたいのにコップがなくて飲めない
- (30) 酒を飲みたいがコップを探すのが億劫で飲めない
- (31) 嫁がコップをもってきてくれて、やっと酒が飲めた
- (32) 昨日は気分よく酒が飲めた
- (33) 私は強い酒でも飲める
- (34) 私は上手に字を書ける

なお(34)は「自発」ではなく「逆使役」として立てられている調査例文である。

青森県方言の自発表現についても此島(1982)に指摘があり、「自発には、可能形の兼用よりも、読マサル・起キラサル・見ラサル・来(コ)ラサル・ササルのようにサル(四段活用)を付ける形式が普通である」と述べられる。しかしこれ以上の詳細な分析はなく、可能表現を記述する本稿の観点から言えば、サル・ラサルと可能表現の範囲の共通点・相違点について観察したい。したがって、上の例文にサルが出現するか否かに注目する。

以上の計34の例文に対する話者の回答(および話者による調査者への解説の中で発せられた発話)を元に、むつ市方言の可能表現について記述する。以降の記述は、潜在可能(3節)、実現可能(4節)の順に進める。

3 潜在可能について

3.1 五段動詞の場合

本節では、調査番号(1)~(12)について記述する。まずは否定の潜在可能(1)~(4)から見ていく。心情可能・能力可能・内的条件可能の(1)・(2)・(3)は、次のように回答された。

- (1) 怖いからひとりで行けない → おっかねふて ひとりで イゲネ
- (2) 体が弱いので遠くまで行けない → わら からだ わるふて とーく さ イゲネ
- (3) 足が痛いので今日は行けない → あし いたくした して きょー イゲネ

すなわちいずれも可能動詞「行ける」を用いており、可能動詞以外の回答は得られなかった。
次に外的条件可能の(4)は、次のように回答された。

- (4) 雨が降っているので行けない → あめ ふっちゃーして イガイネ

これは助動詞レルの接続した /igarene/ の転訛形であると考えられる。なお話者は「雨が降っている」などの状況では「イゲネ」とは言わないと回答した。つまりレルは外的条件可能に用いる可能形式で、可能動詞はそれ以外(心情・能力・内的条件)の可能に用いる可能形式であると認識しているようである。此島(1982)のいう「能力可能」は、本調査の心情可能・能力可能・内的条件可能を覆う概念である可能性がある。また此島(1982)の「条件可能」には、本調査の「外的条件可能」が該当すると考えられる。

次に肯定の潜在可能(5)~(8)を見ていくが、肯定形では否定形の場合と異なりが認められる。心情可能・能力可能・内的条件可能・外的条件可能のいずれにおいても、可能動詞「行ける」が回答された。回答を以下に挙げておく。

- (5) 友達がいて心強いので、肝試しにも行ける
→ ともだち いるして ここづよいして きもだめしにも イゲル
- (6) よく知った場所なので一人で行ける
→ よく おんべだ とご だして ひとりで イゲル
- (7) 今日は体調がいいので行ける → きょー あんべ いーして イゲル
- (8) 今日は天気がいいので行ける → きょー てんき いーして イゲル

ここでは、(8)の外的条件可能でも可能動詞が用いられ、また話者からは /igairu/ あるいは /igaeru/ は言わない、と回答された。つまり否定形では外的条件可能とそれ以外を区別するが、肯定形では区別していないようである。

次に、過去の潜在的能力を述べる(9)と(10)について述べる。この2つの例文では、いずれも可能動詞形「走れる」が回答された。

- (9) 昔は早く走ることができた。(でも今は早く走れない。)
→ まえは はやく ハシレダ
- (10) 昔は早く走ることができなかった。(でも今は早く走れる。)
→ ハシレネガッタ けど いまは ハシレル

ともに能力可能の領域であるため、可能動詞が用いられていると考えられる。

(11) と (12) では、以下のように回答された。

(11) このペンはまだ書ける → まだ ツガエル / まだ カゲル

(12) このペンはよく書ける → カギヤスイ

(11) は、「使える」または「書ける」と言う、と回答された。動詞の違いはあるが、いずれも可能動詞であり、「書かレル」は回答されなかった。既に述べたように、肯定形では外的条件可能にも可能動詞が使用できるようであった(→(8))。そのため、動作主の能力とは言い難い(11)でも、肯定形であるために使用できたものと考えられる³。(12)では難易形容詞「ヤスイ」が後接したものしか回答されなかった。

3.2 一段動詞の場合

次に、一段動詞の潜在可能の回答について取り上げる。まずは否定形の(21)~(23)を見る。

(21) (派手な服を見ながら) 恥ずかしくて着ることができない
→ はですぎて キライネ

(22) 孫はまだ小さいので一人で服を着ることができない
→ まだ ひとりで キレネ

(23) この服はもう小さくなったので着ることができない
→ ちゃっこふて キライネ

心情可能である(21)では可能動詞形「キレネ」が回答されると予想されたが、話者はラレルの転訛形「キライネ」を回答した。これは、あるいは「服の派手さ」という外的な要因を重視した可能性があり、「心情による」という条件を引き出せなかった可能性がある。判断を保留しておきたい。

能力可能である(22)にキレネが回答され、外的条件可能である(23)にキライネが回答されたのは予測に沿った形であり、むつ市田名部方言では概ね能力可能と外的条件可能とで形式を使い分ける表現方法が採られていると考えられる。

次に、肯定形である(24)~(26)を取り上げる。

(24) 孫は大きくなって一人で服を着ることができるようになった
→ ひとりで ふく キレル よーになった

(25) この服は昔のものだけどまだ着ることができる
→ まんだ キルニイー / まんだ キレル

³ 否定形(例:このペンはもう書けない)の場合は確認できていない。

(26) 目覚まし時計があるからちゃんと起きることができる

→ オギレル

能力可能である(24)にキレルが回答されたのは予測に沿っている。外的条件可能の肯定形である(25)では、スルニイーが回答された。その他の回答として、この場合もキレルが使えると回答され、また話者の内省によれば(25)では /kiraeru/ (ラレル形) とは言わない、とのことであった。

(26)は外的条件可能で、「着る」よりも1音節多い「起きる」で尋ねたものであったが、ここでも可能動詞形が回答された。話者の内省によると、この場合も /ogiraeru/ (ラレル形) とは言わない、とのことであった。やはり肯定形では(ラ)レル形が衰退し、可能動詞形に統一される方向に変化が進行していると考えられる。

4 実現可能について

4.1 五段動詞の場合

本節では、まず調査番号(13)~(20)について記述する。まずは否定の実現可能(13)~(16)から見ていこう。否定の実現可能では、全て可能動詞形「行ける」が回答された。

(13) 怖いので行くことができなかった。

→ おっかねふて イゲネガッタ

(14) 歩くのが遅いので遠くまで行くことができなかった。

→ あるぐの おそいして とーくまで イゲネガッタ

(15) 体調が悪かったので行くことができなかった

→ あんべ わるして イゲネガッタ

(16) 天気が悪かったので行くことができなかった

→ イゲネガッタ

外的条件可能である(16)ではレル形が回答されることが予測されたが、レル形は出なかった。潜在可能と実現可能との相違である可能性があり、追調査が望まれる。

次に、肯定の実現可能である(17)~(20)を見る。ここでは、心情可能・能力可能の(17)と(18)では可能動詞「行ける」が回答されたが、内的条件可能の(19)と外的条件可能の(20)では可能形式が回答されず、無標の動詞過去形が回答された。話者の内省によると、(19)・(20)の場合では「行けた」のように言わないとのことだった。

(17) 歌ったら怖くなくなって、ひとりで行くことができた

→ うたながら あるいたっきゃ ひとりで イゲダ

(18) 歩くのが早いので遠くまで行くことができた
→ あるくの はやいして と一くまで イゲダ

(19) 体調がよかったので行くことができた
→ あんべ いふたったして イッタ/イッテキタ

(20) 天気がよかったので行くことができた
→ てんき いふて イッタ/イッテキタ

可能表現が肯定と否定とで非対称性を見せることは渋谷（1993）が指摘している（例えば、否定可能の方が肯定可能よりも使用率が高いこと）。その理由の一つとして渋谷（1993）は、無標の意志動詞との意味上の距離の大小という観点から説明する。意志動詞の、①無標の肯定形・②無標の否定形・③可能形式の肯定形はいずれも動作主体の期待する動作と実現する動作とが一致するため、無標の動詞述語文と可能文との間の意味上の距離が小さい。

- ① あした東京へ行く （期待する動詞・実現する動作＝行くこと）
- ② あしたは東京へ行かない （期待する動詞・実現する動作＝行かないこと）
- ③ あしたは東京へ行ける （期待する動詞・実現する動作＝行くこと）

一方で、④可能形式の否定形は動作主体の期待する動作と実現する動作とが一致しない。そのため、無標の否定形と可能形式の否定形とでは意味上の距離が大きいと指摘する。

- ④ 行きたいけど、用事があって東京へは行けない
（期待する動作＝行くこと）（実現しない動作＝行かないこと）

つまり「行く」と「行ける」との違いよりも、「行かない」と「行けない」との違いの方が大きい、ということである。

ただし今回の調査では、潜在可能・肯定形の調査例文（(5)～(8) や (11)・(12)）では無標形は回答されなかった。そのため、実現可能（特に過去形）の場合に、中でも内的条件可能・外的条件可能の場合に、無標の肯定形（行った）との距離が小さい（と話者は認識している）と考えられる。その理由についての具体的説明にはまだ至っていない。また (19)・(20) のような例文で無標形が回答されることがむつ市方言だけの特徴であるのかも不明である。現時点では現象の報告に留め、理由解明については今後の課題としたい。

4. 2 一段動詞・カ変の場合

次に一段動詞・カ変動詞の場合を見る。調査例文はわずか2文であり不十分の感は否めないが、この2文に対する話者の回答から推定されることを述べる。

(27) 嵐がひどくて一歩も外に出られなかった
→ いっぽも そと え デラエネガッタ

- (28) 天気がよかったのでやっところこに来ることができた
→ やっど コレダ (のー)

(27)ではラレル形が回答され、(28)では可能動詞形が回答され、異なっている。(27)と(28)は、一段動詞かカ変動詞か、肯定か否定か、という二つの違いがあり、故に二つの回答の違いが動詞の活用によるものか肯否によるものであるかが明確にはわからない。追加調査が望まれる。

ここでは肯定否定の違いに注目して述べる。まず(27)ではラレル形が回答されるが、これは「嵐」という外的条件により阻まれたことが意識された結果ではないかと思われる。一方(28)では同じく気候条件を設定したが、ここではラレル形「コラエル」が回答されず(「コラエル」と言うかどうか尋ねたが「言わない」とのことだった)、可能動詞が回答された。これは、3.1節・3.2節で述べたことの一環として理解できるのではないかと考えられる。つまり、外的条件可能以外=可能動詞形/外的条件可能=レル・ラレルという意味的な区別は、否定形では保存されているが、肯定形では外的条件可能でもレル・ラレルが衰退し、可能動詞に統一され始めている、と考えられる。

今回の調査で得られたデータでは十分な論証が難しい。以上の推定に説得性を持たせるための追調査が必要となる。

5 自発形式について

次に、共通語では可能形式で表されるが、調査例文で「自発」にカテゴライズされた例文の回答を見る。「自発」文では以下のように回答された。

- (29) 酒が飲みたいのにコップがなくて飲めない
→ こっぷ いねして ノマエネ/*ノマサラネ
- (30) 酒を飲みたいがコップを探すのが億劫で飲めない
→ こっぷさがすの めんどくせして ノマネ/*ノマサラネ
- (31) 嫁がコップをもってきてくれて、やっ酒が飲めた
→ やっど ノメダ/*ノマサッタ
- (32) 昨日は気分よく酒が飲めた
→ ゆんべなー きもちーぐ ノメダ/?ノマサッタ
- (33) 私は強い酒でも飲める
→ わら なんでも ノメル
- (34) 私は上手に字を書ける
→ わ じょんずに じ カゲル

まず(29)では外的条件可能の否定形であり、これまでの回答から推測される通り、レル形

が使用されている。話者の内省によれば、ここではサルは使用できないようである。

(30) では、状況が想定しにくかったためか可能形式は回答されず無標の否定形が回答された。ここでは、話者が「コップを探すのが億劫だから意図的に飲まなかった」という状況を想定していた可能性がある。ここでもサルは使用できないようである。

(31) は外的条件可能であるが、肯定形であるためかやはり可能動詞が回答された。これまでの考察で述べた通り、やはり肯定形ではレル・ラレルが衰退している可能性が高い。ここでもサルは使用できないようである。

(32) では、話者からは「ノメダ」がすぐに回答され、その後のやりとりの中で話者から「ノマサッタ」も聞かれた。そこで「「ノメダ」だけでなく「ノマサッタ」も言えるのか」と改めて尋ねたところ、話者からは「ノマサッタとは言わない」と返答された。サルは方言話者にとっても内省の難しい形式のようである。調査者とのやり取りの中で聞かれたため例文中には「?」を付しておいた。

(33)・(34) は能力可能（肯定）であり、可能動詞が回答されている。ここでも自発形式は回答されなかった。

以上、3 節・4 節で見た可能表現の調査項目と概ね同様の回答がなされたと言える。一方で当該方言における自発形式サル・ラサルの表現範囲を明らかにすることはできなかった。話者の内省ではサル・ラサルが使用できないとするものの、調査者との談話の中ではサル・ラサルの使用例が聞かれるなど、例文翻訳調査では解明が難しいのかもしれない。今後、調査方法の検討も視野に入れる必要がある⁴。

6 おわりに

本稿では、むつ市田名部方言の可能表現を取り上げ、その使用実態を記述的に整理した。調査不足の項目があり網羅的に整理できたとは言いがたいが、調査結果、次の点が確認された。

- 否定形では外的条件可能以外は可能動詞形で表され、外的条件可能はレル・ラレルで表されるのが専らである（例外は (16)）。
- 一方、肯定形では上の使い分けが弱化し、可能の条件のすべてが可能動詞で一本化されている様相が観察される。
- 実現可能（過去形）の肯定形では無標のタ形が回答されることがあり、可能形式が選択されない場合がある。

今後は、部分的に回答されるに過ぎなかったスルニーの使用範囲や他の可能形式との使い分け、サル・ラサルの使用範囲などを調査する必要がある。また一段動詞・カ変動詞では調査量が不足しているため、調査例文を増やして記述の精緻化を行う必要がある。すべて今後の課題である。

⁴ サル・ラサルは東日本の各地に見られるようである（特に東北には広く分布する）。サル・ラサル研究はある程度蓄積もあり、北海道方言を分析した円山（2016）、岩手県盛岡方言を分析した竹田（1998）、静岡県大井川流域方言を分析した中田（1981）、栃木県宇都宮方言を分析した加藤（2000）等がある。サル・ラサルは地域によって表せる範囲が異なるようであり、これらの先行研究を基に分析軸を立てる必要があると思われる。

参考文献

- 加藤昌彦（2000）「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表す形式の意味的および形態統語的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25(1).
- 此島正年（1982）「青森県の方言」（飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4—北海道・東北地方の方言—』国書刊行会に所収）.
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1).
- 竹田晃子（1998）「岩手県盛岡市方言におけるサル形式の意味的特徴」『国語学研究』37.
- 中田敏夫（1981）「静岡県大井川流域方言におけるサル形動詞」『都大論究』18.
- 円山拓子（2016）『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』ひつじ書房.